

島根・トップコーチ

(第87号)平成22年8月19日

【発行】財団法人 島根県体育協会

【担当課】競技スポーツ課

〒690-0015

島根県松江市上乃木10丁目4番2号

島根県立水泳プール内

TEL 0852(60)5052

<http://www.shimane-sports.or.jp>

【第87号発刊にあたって】

島根バスケットボール界黄金期の指導者を語る時、男子の渡辺晴夫先生(松江工業高校)に対して、女子の新井春生先生(安来高校コーチ、安来一中教諭、)を語らなければなりません。

しかし、安来高校の女子バスケットボール部が全国にその名をとどろかせ黄金時代を築いていたことは、バスケットボールの指導者や往年のスポーツファンは知っていますが、若い世代には記憶が薄れつつあります。

そこで、今回は「新井春生という人」というテーマで取り上げさせていただきました。本来なら、直接ご寄稿をお願いしたいところですが、安来一中から愛知県へ転出して活躍されたことや、現在ご高齢であることから、残された文献から先生のご活躍の跡や指導観を探りたいと思います。

新井春生という人

【新井先生のプロフィール】

大正12年11月5日 安来市で誕生

昭和20年 島根師範卒

昭和21年 安来小学校教諭

安来一中教諭(バスケットボール部指導)

昭和30年 安来高校女子バスケットボール部
コーチ(中高一貫指導のはじまり)

昭和32年 静岡国体で優勝

昭和40年 愛知県安城短大附高に転出

インターハイ、国体・・・3回優勝

その後 市邨短大(現・名古屋経済大)

昭和49年 大学選手権優勝(インカレ)・・・
短大チームで日本一に輝く

昭和50年 大学に籍をおきながら、日本リーグ・シャンソンの監督に就任

平成2年 米国「体育学名誉博士号」授与

【安来高での指導実績】

昭和31年 西日本高校選手権 3位

国体(神戸) 3位

昭和32年 高校総体(東京) 3位

国体(静岡) 優勝

昭和35年 国体(熊本) 3位

昭和37年 高校総体(宇部) 2位

国体(岡山) 2位

昭和38年 高校総体(新潟) 3位

昭和39年 高校総体(静岡) 4位

島根スポーツ100年(山陰中央新報社発行) より

「高校女子 安来高が三度目の正直実る」

山崎ら5人がバスケットを始めたのは安来一中1年の時。同校教諭・新井春生の指導を受け、3年生で一般、高校チームを破って全山陰選手権に優勝。「全国制覇」を合言葉に、そろって進学した安来高でも新井をコーチに厳しい練習を続ける。しかし、1年から不動のメンバーで出場した全国大会で、常にダークホース、優勝のチャンスあり、と言われながら、31年の兵庫国体では静岡精華に敗れ3位、32年のインターハイでも静岡精華に敗れ再び3位にとどまった。静岡国体は最後の全国大会、しかも静岡精華とは3度目の対戦だった。身長160センチ台がわずか2人。国体出場チームの中で最も背

が低かった安来高が宿敵・静岡精華高を相手に闘った“まれにみる名勝負”。それは39年まで続く安来高黄金時代の幕開けであった。

「徹底した体力づくり」

静岡国体優勝の後、33年、34年は低迷したものの、35年の熊本国体で3位、37年にはインターハイ、岡山国体ともに2位、38年インターハイ3位、39年のインターハイでも4位、と安来高校の全国舞台での活躍は続いた。国体優勝から続くこの黄金時代を支えたのはコーチ・新井春生の中学・高校と続く厳しい指導だった。「バスケットを通しての人間づくり、そして可能性の追求が目的でした」という新井の指導は「やめようと思ったことが何度あったかわからない」と口をそろえるほど厳しかった。「まず基礎体力を」という方針から、練習に入る前にランニング、石段上り、河原の砂地でのフットワークを選手に課した。「松源寺というお寺の石段を20往復して、伯太川の河原でフットワーク、それに清水寺までのマラソンでしょう。ボールを持つ前にヘトヘトになったよ」「私は貧血でよく練習中に倒れたんです。一人で泣いたことも何回もありますよ」やっとな体育館に入っても新井の容赦のない指導は続く。「誰かが気を抜いた練習をしていると、罰として全員が走らされました。私は主将だったから代表でしかられることも多かった」・・・。

安高新聞(32.12.4)より

「情熱と強固な意力が勝因」・・・

学校長 山田 山田 山田

・・・昭和30年12月のある日安来一中の新井先生が突然私の所へ訪ねて来られ、次の話をもたられた事を回想する。今、一中には極めて優秀なバスケット選手数名が来春卒業するのであるが、現在の処卒業後の進路は米子・安来高校・就職とまちまちである。自分としては

現在のチームがそのままの姿で訓練されるならば相当強力なチームに成長する確信があり、全国に覇を唱える事も或いは夢ではないと思う故に、これ等生徒がばらばらに四散することは何としても残念に思う。生徒自身の為に、島根スポーツの為に何とか協力してもらいたいとの事であった。私は熱心な先生の話聞き、強い感銘を受けながら固く手を握ったのである。先生は非常に喜ばれ熱心に生徒の家庭訪問を繰り返されて折衝に当たられたのである。私もしばしば関係保護者会を開いて話し合いの機会をもったのである。その結果全員本校進学が決まり、我々の希望は満たされたのである。

本校入学後はそのままの形でチームが編成され、熱心な指導と訓練が始まったのであるが、本校の足立先生は東京高師バスケット出身であり誠に恵まれた環境が作られたのである。

・・・誰も未だ登校していない始業まえの猛練習、降雪の中の駆け足訓練等、文字通り寸暇をおしむ訓練が継続されていたのである。しかしながら超人的ではあったが決して狂人的ではなかった。絶えず綿密な科学的分析の基礎に立った訓練であり、精密に計算された計画的な訓練であったのである。その上選手達はバスケットオンリーではない。本来の使命は勉学でなければならぬ。この点についても常に心が配られ、その結果は本年卒業する5人の正選手の中3人迄は大学進学を希望し、その成功の為に準備もなされているのである。私は人間の意力の恐ろしさを目のあたり見ることが出来た。・・・

安高新聞(32.12.4)より

「今日の夢、明日の夢実現」・・・

コーチ 新井春生

私達の生涯忘れることの出来ないあの感激、この日あるを夢見て日夜努力精進してきた6年間、勝利の日までをふりかえって見よう。

「身体的な面」

私はまず、スポーツの持つ目的の一つである健全な身体を作ることに努力しました。身体の発達段階を科学的に考察して、本校に於いては、先ず選手の毎日の健康状態を知るのに最も良い方法である体重測定をし、練習前と練習後の体重の増減をグラフに書き、常にその増減が一定のカーブを保つように身体の調節をし、過労を発見し、自己の身体についての最大の注意を払う能力を身につけさせた。

そして身体を強くするためには、疲労の状態までは練習し、疲労と過労の限界まで訓練しなければならない。多くの者は疲労しかけると中止してしまうようでは効果は無い。選手達が6年間バスケットボールと生活してきて、病気をしたというのは風邪をひいた位なものである。

「精神的な面」

選手生活をして、果たして望ましい性格が養われるかどうかは、科学的な調査方法によって調べたところ、はっきりと其の良さが実証されました。特に人間関係において協力、明朗、責任、礼儀、正義感等のスポーツマンシップは、非選手より著しく良い結果が出ている。また、学校によって、学校差のあることもうかがわれ、指導者の指導力との関係等は大いに参考になる点があった。我々の生活のどの断面を見ても油断の無い生活でなくてはならぬ。道を歩いても、一杯の水を飲むにつけても、考えて行動する心の働きが肝要で、かかる生活をするためには相当に意志が強くなってはだめで、常に求めて止まぬ努力、即ち雨だれが岩石に穴を掘る諺があるように、希望を捨てず、必ずやりとげるというファイトがなくては初一念を貫徹する事は不可能である。選手達はあらゆる困難と戦い、常に希望を捨てず心にゆるみがあること、互いに励まし合い、この6年間精進し、みんなから愛される選手達になってきたことは、この上もない喜びであります。

「技術的な面」

人間の能力の限界を知ると共に、自己の能力の限界を知り、途中で投げ出さないでぎりぎりの線まで練習し限界を知る事が必要である。上達の公式を回数 + 研究であると考え、1回でも多く、そして1回毎に反省し研究しながら練習する事が大切である。そして科学的に統計を取り、グラフに進歩の度合いを記入しながら、又欠点を知りながら練習することは、統計を取らない場合よりも、18%の効果がある事もはっきり分かった。尚、技術面に関しては、如何なる人の言でも耳を傾け求める心を忘れてはいけない。複雑な技術の習得には、技術を分解して練習し、単純な部分練習は20分間が限度である。又全体的な練習に要する時間は2時間が限度である。ただし、時間を無駄にせず真剣に練習している時の事である。

緻密さと独創性で40年(ベースボールマガジン社)

「情熱を燃やし続ける知将・新井春生」

新井監督のバスケットには緻密でいて独創性を持った魅力が潜んでいる。それは選手自身にやる気を起こさせるようにする指導技術でもある。「毎日の練習でプレーの一つ一つについての到達目標を持たせ、わずか1ミリでも前進を目指して努力させることです。自己のプレーについて、よし悪しの判断が正しく出来るようになれば、おのずと技術は向上します」という。

この「やる気」を第一条件として、確立のバスケットへと移行する。毎日の練習に対し、常に目標を持ち、油断することなく、努力を続けるプレーヤーへとなるように「数字」はあらゆる反省の材料と次の意欲を示してくれる。チームにおける貢献度を毎日の練習ゲームの中から、データーによる評価基準を過去に表示していた。その評価は野投を2、フリースローを1とし、

リバウンド、アシストやインターセプト、ヘルドに持ち込むいいディフェンスに1等のプラスとなるプレー。逆にマイナスとなるプレーにはファール-1、バイオレーション-1、ヘルドの持ち込まれたオフェンスで-1、とそれぞれを記入し、その練習ゲームごとにトータルを図示していた。

この評価基準もその年度のチーム状況により変化をつけ、ディフェンスを強化したい場合には、マイナスとなる基準をより厳しく、ゴール近辺で簡単にボールを持たせたディフェンスにはマイナス2としていた。

この方法は新井監督が昭和43年当時に実施していたものだ。

チームの戦力分析とあわせ、こうした貢献度によつての強化方法が結果としてインカレ上位を維持した要因にもなっている。

「バスケットはルールの変更などもあって“生きもの”なんです。だからこそ、毎年同じことをやっていると進歩がありません。年度年度で違う方法、考え方で臨まなければなりません」という新井監督の研究心は旺盛だ。その発想もユニーク。

確率のバスケットを追求するのもその辺だ。

1000本シュートとなれば、入るまでの時間からしても大変なこと。それならば逆に時間を半分にし、回数よりも確率を上げることに専念した方が効果も大きいことになる。

何本くらい放れば何割が可能なのか？これを選手個人によってノルマを決めてしまうという発想だ。

また時間との問題も考えて、得点をする距離からのシュートも5分間で連続10ゴールといった具合に、確率を重要視した練習方法もある。シュート技術に関する指導法には例をあげるときりがない。このあたりがシューターづくりの名人とも言われる由縁である。

今月のことば

ノーベル賞を受賞した行動経済学者のダニエル・カーツマンによると、物事の「結末」がその思い出としてより強く脳裏にインプットされ、その後大きく影響をする、という「ピークエンドの法則」を紹介します。

この法則を活かせば行動への興味ややる気を変えることが出来るというものです。

例えば、午前の練習試合で全敗した。そして午後の練習試合も全敗した。午前の練習試合で全敗した。そして午後の練習試合で最後の1試合を勝った。

の場合は、マイナスの出来事 + マイナスの出来事・・・マイナスの出来事が増幅されて強く記憶に残る。の場合はマイナスの出来事 + プラスの出来事・・・プラスの出来事がより強く記憶に残る。というのですが、即ち結末部分の出来事がより強く記憶に残る、というものです。

昔から日本でも、このことを意味する「終わり良ければ全て良し」という言葉がありますし、かつて現役で指導していた頃、県外の遠征試合などで、最後の試合に勝って終わることを「勝ち逃げ」と言っていました。お互いに最後の試合だけは勝ちたいと思っていました。これも、この法則のとおり、ずっと負けていても最後を勝って終わることは大きな自信が脳裏にインプットされるからです。

第26号で、「ミーティングを大切にせよ」について、最初のミーティングで一日の練習の中味が決まる（目的意識、意欲の喚起）最後のミーティングで明日への意欲を喚起せよ・・・と書きましたが、指導者の最後の言葉は選手にとって最も脳裏にインプットされることを重く捉え、明日への希望と意欲につなげる為に、マイナスの出来事ばかりを述べるのではなく、プラスの出来事を掘り起こし、ピークエンドの法則を活かしたいものです。

競技力向上統括アドバイザー
荊尾俊